RITO-NDO

とんど

農村だった頃から続けられている地域行事。年に一度お正月に竹を組み、ちいさな造形物が姿を表す。かつては豊作を願い炎を囲った。現在は、しめ縄やお年玉袋、書き初めなどを各家庭から持ち寄り、「この年が良いものでありますように」という人々の想いを昇華し炎を囲う。少し姿を変えつつも同じ想いを思いを載せ現存する地域のアイデンティティのひとつ。

	1月	3月	6月	7月	10月
主な地域行事	とんどまつり	大日堂まつり	避難訓練	納涼まつり	田中山神社大祭 俵みこし巡回・奉納
仮設建築の動き	燃やす	つくる		完成	使う

つくる

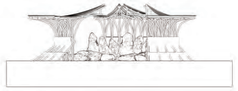
常設建築の利用者が、竹工房にふらっと立ち寄り仮設建築のパーツを少しづつ作っていく。

使う

協働して作り上げたものを使うことで自分も共同体の一員であることを認識できる。

燃やす

RITO-NDO における「火」という破壊者を確立させることで、RITO-NDO への愛着を育ませる。



写し出す記憶

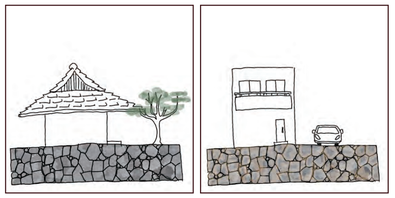
変わらない石垣の上で、建物だけが変わっていく記憶

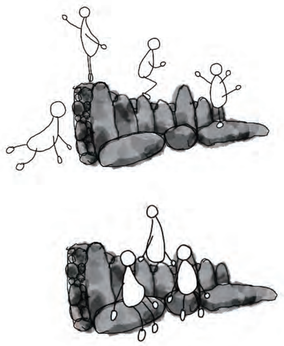
変わらないものに対する安心感と変わりゆくものへの愛着が沸いた

↓

仮設建築の土台を石垣を見立てて設計する。
仮設建築は”変わりゆくもの”として姿を”消したりあたわれたりすることでアイデンティティの継承と郷愁の念を留める

旧会館 → 住宅



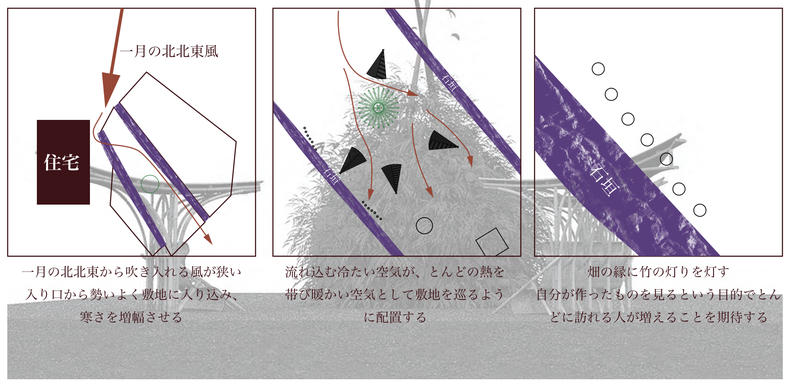


仮設建築がないときも石のベンチは
様々な日々を過ごし公的郷愁の場となっていく

通常時ととんど時

10 月に完成した RITO-NDO は日常的に使用され人々の郷愁の年が蓄積される。
とんどの日、この仮設物をとんどが行われる農地へと運ぶ。RITO-MIKO を使用した人が帰りに作って帰った、竹のオブジェも一緒に配置する。
これまで関わる機会がなかった人も新たに携わる場面が増え、とんどという行事が世代の垣根を超えた公的なものへと変化していく。

RITO-NDO 配置計画



一月の北北東から吹き入れる風が狭い入り口から勢いよく敷地に入り込み、寒さを増幅させる

流れ込む冷たい空気が、とんどの熱を帯び暖かい空気として敷地を巡るように配置する

畑の縁に竹の灯りを灯す
自分が作ったものを見るという目的でとんどに訪れる人が増えることを期待する

2024/1/7　萩原とんどの実態

とんどの作業は、青年団15/30人の人が参加
仕事があるため青年団の参加率が 1/2

午後五時に年男と子供が火をつける

コロナの時は2,3年やってない
去年から再開

20 代くらいの子供がいる家族の姿はほとんどない

大きくて子供が高校生

南の方のマンションに住んでいる人たちが来なくなっている

家族でくる人がほとんど

若い人が少ない

ガードレールが足ていないところにロープ
歩道がないところにカラーコーン

風が強く吹く場所がある

寒い　暗いから畑の縁が分かりずらい

長時間いる人が少ない

青年団の男性陣が伐採から組み立てまでをやっているため、女性陣はほぼやることがない

組み立てや、ぜんざいなどとんどの準備に少しも関われていない人は来づらい

最後は燃やせるものはなんでも燃やす

150 人が足を運んだ

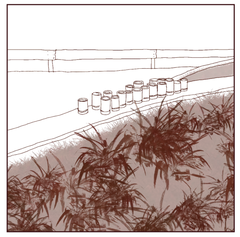
午後十時くらいから水をかけて消化し始める

土台しか残らない

残った土台は来年も使う

次の日に、磁石を使って金具の残りを探す

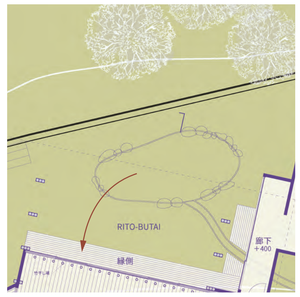
萩原とんどの作り方



竹で作ったコップが畑の縁に並ぶ姿

燃えるものを全て放り投げる姿

RITO-NDO ができるまで



step1

4 年ほど経って、糖分が少なくなり、強固な繊維のある竹を建築素材として使用する。
ホウ砂塩という塩水の中に、小さな穴を開けた竹を水が黒くなるまで浸して、竹の内部に自然に生成される砂糖を流し出す。
その代わりに塩分が内部に入り込み、防水と防腐剤の役割を果たすという下処理を行う。
この一連の流れを RITO-BUTAI の池周辺で行い、舞台の竹干し場で干すことで、地域のアイデンティティの詰まった舞台を彩る一員ともなる。

step2

下処理が行われた竹は、RITO-MIKO へと運び竹工房や青空工房で加工が行われる。曲げ部材は熱した後、木枠にはめてテコの原理を使い丁寧に曲げ竹のしなやかさを表現していく。

step3

RITO-MIKO を使用した人たちが細かなパーツを少しずつ作っていき、10 月の俵神輿の祭りに合わせて完成させる。